

3.2.4.1 2年次中間発表会・全体発表会

担当：梅村 佳史

実施時期：令和5年11月17日(金)：中間発表会 場所：HR教室・小講義室・実験室
令和6年2月9日(金)：全体発表会 場所：本校アリーナ・大講義室
対象生徒：本校1,2年次生徒 計710名

1. 研究開発の経緯と目的

本校では「神戸学」で課題研究活動を行っており、大学の講師を招いて今後の探究活動の助言をいただく「神戸学中間発表会」(以下、中間発表会)と、探究活動の成果を発表する「神戸学全体発表会」(以下、全体発表会)を行っている。昨年度より「中間発表会」では、音楽コースと美術デザインコースを除く、8つの系・コースの各班を分野別にグループ分けをして発表を行い、大学の講師の方から専門的な助言をしていただいている。また、いただいた助言を生かして探究活動をさらに発展させ、その成果を2月の「全体発表会」で発表している。



「中間発表会」では、大学などから24名の講師を招き、80テーマを20のグループに分け、スライド発表を行った。生徒は研究の進捗について発表を行い、講師から助言をいただいてその後の探究活動につなげた。また「全体発表会」では、午前中は各系・コースの代表によるスライド発表会を行い、午後からアリーナにて全ての系・コースの全班がポスター発表を行った。ここで得られた専門家からの質疑や評価が、これ以後の生徒の探究活動の発展につながり、さらに様々な力を成長させると考えられる。また1年次にとっては、これから行う探究活動の参考になると考えられる。

2. 仮説

本事業により、育むことができる力は以下の通りである。

| | A:課題設定力 | B:企画協働力 | C:論理考察力 | D:自己学習力 | E:表現理解力 | F:知識・技能 |
|----|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 仮説 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

「中間発表会」「全体発表会」やそれに伴う質疑応答により、課題設定力以外の全ての力の向上が期待できる。ポスター発表では、発表の構成を考えたり、質疑応答への対応を想定したりして発表準備を行うことで、企画協働力が向上すると考えられる。また、発表や質疑応答を繰り返し行うことで、論理的思考力や自己学習力、表現力の向上に効果があると考えられる。

3. 研究内容・方法

「中間発表会」ではこれまでの課題探究活動の成果をスライドにまとめ、発表を行った。また、系・コースをまたいだグループ分けを行い、様々な考え方を持った生徒同士で質疑応答を行った。そして、大学の講師など各分野の専門家からも質疑応答や助言をいただいた。

「中間発表会」後は各系・コースの中で、「全体発表会」に向けたポスターの作成と「中間発表会」での助言に基づいた探究活動を行った。そして1月には各系・コース内で事前に発表会を行い、代表班を選出した。

「全体発表会」では、午前中、代表班によるスライド発表を大講義室で実施し、生徒は自身の HR 教室にて中継映像を視聴した。午後には本校アリーナにて 73 のテーマを 2 つのグループに分け、ポスター発表を行った。その際、各班で最低 3 回は発表や質疑応答をできるようにした。観覧者は 1・2 年次生徒と、「中間発表会」にも参加いただいた大学の先生方であり、大学の先生方には審査もしていただいた。また、神戸市立の中学校と高等学校に案内を配布し、参加された中学校・高等学校の教員からも助言をしていただいた。

4. 検証

① 「中間発表会」に関して

「中間発表会」では、発表を行うことで表現理解力を養うことができた。また、質疑応答を通して仮説や検証活動に関しての妥当性を再検討したり、検証結果の見直しをしたりする中で論理考察力を高めることができ、これまで行ってきた探究活動の振り返りと今後の探究活動の見通しを立てることができた。さらに、大学の先生方といった専門家からのアドバイスによって、課題の再設定ができ、再度探究サイクルを回すことによってその後の探究活動を充実させることができた。

「中間発表会」では、自身のテーマと類似した他の系・コースも含むグループでの発表を行うことで、他の系・コースの発表も聞くことができた。その中で、分野ごとにテーマに対する様々なアプローチの仕方が存在することを学ぶことができ、1 つのテーマについて多角的に見る力を養った。

② 「全体発表会」に関して

代表班は各系・コース内で発表を行い、選出した。その他の生徒は代表班の発表を視聴する中で、自身が系・コース内で行った発表や質疑応答と比較・反省を行い、改善点を見出した。この反省はその後に行われたポスター発表ですぐに活かすことができた。

ポスター発表では、仮説検証について根拠をもった説明を行い、理論的な結論や提案を発表することができていた。特に、インタビューやアンケート、フィールドワークなど自分たちで実際に得たデータを統計的に分析したり、先行研究の結果と比較したり説明することが「中間発表会」のときよりもできていた。また、発表の中でポスターだけでなく、タブレット端末を用いて動画や補足説明用の資料を掲示し、聴衆に研究内容を分かりやすく伝える努力を行っている班が多く見られた。これは、表現理解力の向上にもつながったと考えられる。

質疑応答においても、論理的で根拠に基づく応答ができていた。また、全生徒が自身の専門分野以外の発表に対する質疑応答を経験することで、研究手法や分析方法などの過程の多様さを知り、それらについて考えることができた。特に今後探究活動を本格的に行う 1 年次にとっては、視野を広げる良い刺激となった。生徒の振り返りでも、質疑応答が発表生徒にとって良い刺激となっていたこと、1 年次生徒にとっては来年度の「神戸学」に取り組む上での高い意欲につながっていることが伺えた。

ポスターの審査をしていただいた先生方からは、探究活動のテーマ・内容における独創性や、現代にマッチしたテーマ設定、多様な視点の持ち方に対して高い評価をいただくことができた。質疑応答に関しても自信をもって答えていた生徒が多く、生徒は自己肯定感を高めることができたのではないかと、という評価を得ることができた。

全体を振り返ると、発表者に充実感を与え、探究活動へのさらなる意欲につながる、とても有益な事業であったといえる。反省点は、発表準備期間が短いなど、探究サイクルにおける時間配分が難しかったことである。今後、生徒負担の軽減を目指したカリキュラムの改善を行う必要があると考える。